

地理と歴史についての草稿

西 川 治

目 次

まえがき

I 歴史の地理学的考察

II 地理の歴史学的考察

III 社会・経済の発展段階論

あとがき

ま え が き

イギリスの傑出した歴史地理学者ダービー (H. C. Darby, 1909—)¹⁾ が述べているように、「地理学と歴史学とのあいだには高い障壁も、防御壕も、そして関税境界も認めることはできない」。また社会経済史家にとって相当な地理学的素養が必要であり、歴史地理学者にとっては十分な社会経済史的基礎が不可欠であることも今さら繰返すまでもない。その意味で文学部に地理学科が設置されているばあいは好都合であるが、理学部に地理学科が所属しているばあいには、地理学者と歴史学者との交流はとかく疎遠になりがちである。私は理学部育ちであって人文・社会科学上の訓練をほとんどうけていない。したがって、歴史と地理とが密接不可分の関係にあることは知っていても、それを研究教育面において思うように表現することができない。そうした欠陥を少しでも埋めてみたいと考えて、この草稿をあえて印刷に付して、同学の士はもとより人文・社会科学の方々の御叱正を乞うことにしたのである。

周知のとおり、わが国の地理学会において歴史地理学的研究活動はかなり盛んであり、すでに多くの優れた研究業績が刊行されているし、歴史地理学の本質論の著作²⁾ や普及的な講座類³⁾ や入門書にも事欠かない。それゆえにこの草稿は何ら目新しい知識を加えるものではない。あえて筆者の意図をもらすならば、それは、さまざまな発展段階説に用いられた指標を列記して、それを地域区分の試みにさいして参考に供するのみならず、人文地理学側からも発展

段階論へ寄与する可能性についても言及することであるといつてよい。

I 歴史の地理学的考察

1. 歴史の地理的基礎

経験世界の認識を豊かにし、かつ深めるためには、地理学的ならびに歴史学的な考察がともに必要である。カント (I. Kant, 1724-1804)⁴⁾によれば、地理学は空間のなかにおいて相並んで現われる事象を扱い、歴史学は時間の流れのなかで相次いで起る現象を叙述するものである。このような区別は、もちろん両者の主たる分業上の概念的根拠を述べただけであって、実際には時間と空間とを分離して考察することは許されない。したがって「各時代の出来事の本来の歴史は、とりもなおさず連続する地理にほかならない。それゆえに、ある事象がどこで起ったのか、それによってどのような性質をもつことになったのか、ということについて何も知らないとすれば、それはきわめて不完全な歴史である」と言わざるをえない。これと類似の指摘は啓蒙思想家のヴォルテール (Voltaire ; F. M. Arouet, 1694-1778)^{5), 6), 7), 8)}やヘルダー (J. G. von Herder, 1744-1803)⁹⁾などによってもなされている。それらの歴史哲学的著作においては、歴史的事件の説明に地理的背景がある程度まで考慮されているのである。

カントやヘルダーからも少なからぬ影響をうけたリッター (C. Ritter, 1779-1859)¹⁰⁾は、かなり組織的に歴史の舞台としての自然、地球表面の性状を地区的に、全体と個別地域との関係において考察し、それぞれの歴史上の役割を明らかにしようと試みた。しかし思うに、地理学的考察法が歴史の理解を深めるのは、それが単に人間の活動あるいは歴史の舞台としての自然景観を描写し、あるいは歴史の風土的条件を示すだけではなく、むしろどのような地域の歴史に対しても、各時代における異種の地域社会あるいは文明圏の間に存する地域的関連性に注意を向けさせるからである。また、スペインの歴史思想家のコラール (L. D. del Corral, 1911-)¹¹⁾が述べているように、「古典地理学によって展開された——内面的にも外面的にも弾力的な相関関係を保ってきた——あの全体と個体という概念は、歴史家にとっても少なからず助けとなるのみならず、とくに歴史の諸形態を無造作に客観化し、あるいは現実を抽象化し、あるいは崇高視するような、歴史学の陣営における安易さと危険な傾向とに対して防衛する役割を果しうるであろう」からでもある。現にコラールの代表作「ヨーロッパの略奪」をはじめとして「歴史の運命と進歩」¹²⁾などにも、地理学的見解が随所に現われている。

2. 逆行的方法

現在を理解するためには過去を探り、歴史を尋ねなければならないといわれるが、それでは一体、過去はどのようにして知られたのであろうか。要するにそれは、過去の状況について書かれた歴史や記録類、遺物や遺跡などのうち、発見され入手しえたごく限られた資料によって

個々の史実がつきとめられ、それらの断片を推理によって脈絡づけて復元された類似過去にはかならない。そのさい、史料の不足を補うために多くの類推や演繹的説明が行われる。それは史家の思想的立場や見方によって全く相反することも珍らしくない。歴史は現在と過去との対話であるといわれるのも、各時代における現在の異なる要請によって歴史は再検討され、新しい解釈が求められるからである。

集落の歴史地理学を基礎づけたマイツェン (A. Meitzen, 1822-1910)¹³⁾は、「どの村でも、われわれの足は先史時代の廃墟の中を歩む。それはローマ都市の幻想的な破片や、中世都市の壊れかかった城壁よりも、もっと古いものである」と述べている。同じことはわが国においても実感されるのであって、たとえば日当りもよく、水のえやすい台地の崖下や扇状地の頂部などでは、石器や土器の破片を拾うことは容易である。

古い時代の遺跡の発見は空中写真¹⁴⁾の判読によって格段に増加した。空中写真は、地上からは接近しがたい密林や砂漠の中にひそむ古代文明の跡を期せずして写し出すこともあり、それによって発掘の手掛りを与えてくれる。たとえばイングランドにおいては、牧場や麦畑のなかに、ケルト人の住居跡やローマ時代の道路などが空中写真によっても見出された。それは、宅地のまわりの溝や道路の側溝にたまった肥沃な土に生えた牧草や麦は、周囲よりも成育がよく、モノクロ写真の画面には、きわだって黒く写されることによる。同じように、「羊は作物も森も村も町もみんなたべてしまった」といわれたエンクロージャーによる廃村跡¹⁵⁾や中世時代に刻印された縞状の耕地割の名残りなども、かなり鮮明に写し出されるものである。わが国では、たとえば条里制の遺構の分布範囲を追跡する場合などで空中写真は大きな威力を発揮している。

しかし一般に、有用な史料が多くえられるのは近い過去についてである。したがって、歴史の研究法として現在から出発して、より確からしく復元できる過去へと遡り、徐々におぼろげとなる遠い過去へと探索の歩みを進めていくという方法を採用すべきである。その方が、しばしば多くの仮説の上に立たざるをえない過去のある時点から出発して時代を下っていくよりも優先すべきであろう。ラッツェルはこの方法をすでに示唆したが、歴史家では「フランス農村史の基本的性格の著者マルク・ブロック (M. Bloch, 1886-1944)¹⁶⁾は、これを逆行的方法（遡元法）と名付けてそれを重用している。すなわち、集落の形態、農地割、道路地図などを記した地籍図を克明に比較分析して、農地制度の変遷や地域的多様性を明らかにしたのである。なお逆行的方法と関連して木村尚三郎¹⁷⁾¹⁸⁾が提唱した「第一過去」、「第二過去」の考え方も、現在との対比において過去の異質社会を理解する方法として注目に値する。

3. 地帯層序理論

つとにラッツェル (1844-1904)¹⁹⁾は、民族や文化の移動方向と経路などを復元する手段とし

て、それらの地理的分布の考察を重視し、分布領域の位置と形態、大きさが意味する事柄について説明している。なかでも同心円の分布の指摘は重要である。それは、ある地域から各時代の新しい要素が次々に周辺へ広がっていくと、時がたつにつれて、たとえば古い民族層あるいは文化層ほど遠方におしやられ、より新しいもののほど中心部に近い位置をしめて、新旧の時間関係が中心から縁辺へという空間関係として現われるというものである。後になってテイラー (Griffith Taylor, 1880-1963)²⁰⁾は、このような考え方を“地帯層序理論”として定立し、これを適用して人種の生成分化と地理的分布の過程について論じている。

これと同様の考察法は、民族学における文化圏説²¹⁾の基礎となり、また言語地理学の重要な武器となった。かつて柳田国男²²⁾は、カタツブリの方言を全国各地から採集して、それぞれの呼名の分布を調べた結果、古いものが近畿地方から遠く離れた辺地に見出されることに気がついた。こうした事実に基づいて、かの有名な方言圏論を提唱したのである。しかし柴田武²³⁾によると、この説に都合のよいような方言分布の事例は、まだわずかししか知られていないということである。金田一春彦²⁴⁾は、文化の中心地で新しい言い方が生まれ、それが周囲に波及伝播していく事実、周辺地区に古い方言の残ることは認めながらも、「方言圏論」とは正面から対立する説を立てている。それによると、「音韻、アクセントと言った言語の根幹的部面においては言葉の変化、乱れを防ごうという気持の強い文化の中心地の方が保守的に傾くはずである」というのである。この両説について、いずれが是でいずれが非であるかといった詮議を行うよりも、それぞれがいかなる場合に妥当するか、言葉に限らず、いろいろな文化要素または複合について検討を深める必要がある。変りにくい要素とそうでないもの、模倣されやすいものと、されにくいもの、他の要素と習合しやすいものとそうでないもの、使用頻度の高いものと稀なものといった区別に即して、それぞれの発生地における持続性の強さや、伝播の仕方などについて、なお多くの事例調査の成果を蓄積することが大切である。

II 地理の歴史的考察

1. 歴史地理学

歴史と地理との間に密接不可分の関係があるのは改めて言うまでもないことであり、歴史地理学という専門領域があることも、その現われである。しかし、歴史地理学とは何かという点については意見の相違がみられる²⁵⁾。

まず第1の見解は、斯学を歴史学の補助科学の一つとみなすものである。これによれば歴史の研究に地理学的考察法の一部を適用するだけのことであって、歴史地理学は歴史の分野に隷属するにとどまる。

その第2は、「広辞苑」に採用されている定義である。それによれば、地域を構成する人文

現象を歴史的、発展的に把握して、その特性を研究する学問である。もしそうであるならば、地理学に歴史学的考察法を適用することであるから、歴史地理学は地理学の補助科学ということになる。

第3の見解は、各時代の断面における景観を復原し、その地域的特性や地域間の関連性を究明することが歴史地理学固有の課題であるというものである。これならば、古地理学として地理学の一分科とみなせるが、その方法には歴史学上の専門的訓練が必須であって、まさに地理学と歴史学との中間領域に立脚した独特な学科であるといえる。

第4の見解は、地理の連続が歴史であるとみなして、地域史あるいは景観変遷史が歴史地理学の仕事であるというものである。これは、狭義の地理学と歴史学とを統合した高次元の歴史地理学ということになる。

以上いずれの見解をとるにしても、歴史地理学が地理学と歴史学とを媒介する重要な任務をもつことにはかわりはない。

2. 景観変化の研究

具体的な事物によって充填された地域的複合体としての景観（ランドシャフト）は、歴史的に形成されたものであり、いわば進化の過程にある。

すなわち、その構成要素は時とともに新陳代謝し、あるものは新たに付加され、他の要素は機能を変化したり、あるいは単なる遺跡遺物として残存するものもある。景観要素間の機能的、因果的關係は、歴史学的考察によってある程度検索することができる。

景観進化については第2次大戦前に辻村太郎^{26), 27)}がその著「景観地理学講話」において要述し、ドイツやアメリカにおける代表的な研究例を系統的に紹介している。そこでは景観進化を惹き起す主動因子として、経済活動と政治制度が重視され、景観の進化過程に及ぼす自然環境の制約が明瞭に見られる事例も引証されている。

その後、1947年にはポーランドの地理学者ドブロウォルスカ (M. Dobrowolska)²⁸⁾は「文化景観の動態論」という論文において、人文地理学研究の中心点は文化景観の諸変化に関する問題にあると主張して、文化景観の動態の研究法として次の三つをあげた。すなわち、1. 発生的方法 2. 地球上で現実に生起している諸変化のメカニズムを再構成する経験法 3. 歴史における文化景観の変化の過程を明らかにする発展的方法。さらにこれらの方法によって文化景観を分析するさい、とくに重視すべき点としてあげているのは次のとおりである。1. 農業経済の諸活動における相互依存、および環境因子（土地、植生、気候）と人間との間に行われる一連の作用および反作用 2. 人口（増加と移住）と農業の変化との間に存する相互関係 3. 文化の型と人口との関係、および生活様式と分業との関係 4. 経済的文化的変化および社会過程と地域的環境との間に存する相互関係。このように事象間の相互関係に焦点をあてながら文化景観の

発達過程を追跡することは、現在の地域構造を解明する上に不可欠である。

いうまでもなくドイツはランドシャフト研究の本山である。その指導的な地理学者であるトロル (Carl Troll 1898-1975)²⁹⁾は、現代地理学の中心は景観研究にあるとして、その研究法を組織的に詳述している。その論考においては景観研究の一環として景観変化の扱い方が例示されている。すなわち、過去百数十年来、交通の発達、生産技術の進歩、鉱山の開発、商業貿易の進展にともなう、土地利用にどのような変化が生じたか、工業地域の発達が付近の農村景観にどのような変貌をもたらしたか、といった問題を取上げて、文化景観ないし経済景観の分析には発達史的な研究が必要であると説いている。

わが国は過去百年間において急激な近代化を達成したが、それは各地で著しい景観変化を惹起してきた。また最近における経済の高度成長期には、よりすさまじい変化がくりひろげられている。こうした観察しうるプロセスを克明に分析し、論述しておくことは今日の急務である。

3. 占拠推移の研究

景観変化と類似の観点に立つ占拠推移 (Sequent Occupance) の研究は、1920年代の後半ごろからアメリカ合衆国において始められた。それは地域的環境の変化を段階的に復元してそれらの推移の理由を究明し、それによって地域の特性を歴史的にも裏付けようとする意味をもっている。この着想は、おそらくクレメンツ (F. E. Clements, 1874-1945)³⁰⁾の著書、「植物遷移、植生発達の一分析」あたりから示唆をえていると思われる。

占拠推移の研究意義について理論的に述べたのはウィットゥルスキー (W. Whittlesey, 1890-1956)³¹⁾である。それによると、地理学を単なる記述的な地誌から救い出すためには、地域を動態的に発生的に研究する必要がある。人間が一定の土地を占拠する仕方、そこに展開する生活様式は、いくつかの段階を更新して現在に至っている。その過程の類型数はそれほど多くはないはずであるから、その類型によって地域を区分することが望ましい。それによって地域の特性は、単に現在の一断面によって規定されるので、いわば立体的に重層的に把握されるのである。ウィットゥルスキーは1945年にも、アメリカ地理学者協会の会長演説において、地理学における時間の次元を再び強調した。すなわち、いかなる場所の地理学的論議も、時間の因子を考慮していなければ不十分であり、その意味からすれば、すべての地理学は歴史地理学であるというのである。

占拠推移の研究例はかなりあるが、1例をあげると、アッカーマン (E. A. Ackerman, 1911-1974)³²⁾は、ボストン市の西方郊外コンコード地区において研究し、その占拠様式の変遷を5段階に分け、その変化の理由を説明した。五つの段階は、1. インディアンの時代 2. 自給的農業に基づく植民時代 (1635-1775) 3. 酪農および手工業時代 (1775-1830) 4. 農村人口の流出

時代(1830-1880) 5. 集約的な園芸農業と宅地の増加が目立つ現代。

このように同一地方における占拠様式の変遷をつぎつぎにみると、生産技術の進歩、交通手段や都市機能の発達などが、その土地の姿を変える上にどのような役割を演じたかについて認識することができる。

さらに各地域の特性は、それぞれの占拠推移を相互に比較することによって、いっそう深く、より明瞭に識別される。それには占拠様式の分類および用語を定めておく必要があるとして、ドッジ (R. E. Dodge, 1868-1952)³³⁾は次のような例を示した。すなわち、主要な占拠様式としては狩猟、採集、農業、牧畜、林業、漁業、工業、商業、保養、公共事業のそれぞれを中心とする10の土地利用類型に分けた。これらはさらに細分され、たとえば農業の場合には原始的農業、原始的牧畜、粗放的牧畜、集約的牧畜、粗放のおよび集約的穀作、普通農業、企業的農業が区別されている。

こうした占拠推移の考察法は、地域計画に応用することができる。たとえばダラント (L. Durand, 1902-1970)³⁴⁾は、ウィスコンシン州においてすでに開拓されている西部のシャワノ高地の発展過程を分析して、それからえられた知見に基づいて、同州北部の高地における新しい入植地の進展の仕方について建設的な示唆を与えている。そのさい、開拓開始期の時代的ずれに伴う要因の差異について考慮されていることはいうまでもない。

III 社会・経済の発展段階論

1. 人文地理学への適用

現在の世界を概観すれば、原子力の実用化に成功している国々もある反面、今日でも採集、狩猟文化の状態にとどまっている辺地も残存していることが知られる。その中間には、産業革命および資本主義の影響をさまざまな度合にうけた地方、旧植民地におけるように高度の移入文化と土着文化との複合ないし、併存が見られる地方もある。そこで、人類史の各発展段階にそれぞれ対応する特徴的なメルクマールが定立できれば、それによって世界の地域区分を行うことも可能である。

地理学においては1930年にサッパー (K. Sapper, 1866-1945)³⁵⁾が文化の階梯について述べているし、1934年にはイエーガー (F. Jaeger)³⁶⁾は、ヨーロッパおよびロシア文化の影響、文化景観の発展段階をも加えて、世界の人文地理学的区分を示した。1943年にはこれを改良した地域区分図³⁷⁾を発表している。

このように歴史的基準を取り入れた地域区分に即して諸地域を比較考察する方法は、もっと重視される必要がある。もちろんそのさいに留意すべき点がいくつかある。まず第1にフェーヴル (L. Febvre, 1858-1956)³⁸⁾も指摘しているように「さまざまな民族がある 期から他の期

へ、ある段階へと必ず通らねばならない過程は存在しないことである」。第2にどのような発展段階説をとるにせよ、そのより古い段階にとどまる民族あるいは社会が、それよりも新しい段階のものよりも、資質や能力において劣っているとか、その道徳や思想が低俗であるなどと即断してはならない。第3には、現存する原始的民族の文化を旧石器時代とか、農牧業の初期の文化と対比するのはよいとしても、両者を同一視することや、不用意に一方から他方を類推することは慎まねばならない。第4に、文化の発展段階が同一の地域において、同一の民族によって次々に実現されることはまれだということである。むしろ多くの場合、次代の新しい文化は、それ以前の中心地の周辺地帯で興隆する傾向が認められる。一般に革新的な制度は、その理念が旧社会体制内の矛盾の批判から生まれるとしても、そこでは実現されにくいものであり、むしろ障害や抵抗の少ない隣接した地方で採択されやすいのである。たとえば、キリスト教はユダヤの地の外にひろがり、仏教もインドの周辺地方で栄えてきた。

2. 発展段階論の展開

いうまでもなく発展段階論は近世にはじまる進歩史観に基づいている。ルネサンスのヒューマニズムは進歩の信念を生み出し、啓蒙主義時代には、宇宙の合理性への信頼感、環境を支配する人間の力、究極的には運命に挑戦する人間の力も増大するといった自信が、進歩史観を樹立した。テュルゴー (A. R. J. Turgot, 1727-81) の「世界史論」やコンドルセー (M. de Condorcet, 1743-94) 「人間精神進歩の歴史素描」(1795) などはその代表である。

このような史観は、19世紀の後半以後になると生物進化論や唯物史観の影響をうけながら展開する。それは、あたかも産業革命によって優位に立った西欧社会が人類史の最先端を進んでいるのだと証明してくれるようなものであったから、一般人の歓迎するところとなった。しかし、20世紀に入って諸科学が発達するにつれて、従来の諸発展段階論は厳しい批判をうけ、次第に色あせたものになった。すなわち、人類はいかなる民族でも同じ素質、心性を備えているから、同じような条件の下では同種の文化を生み、文化は一定の単線コースを順々に辿って発展するといった学説は、文化伝播論、文化圏説、機能主義などの新学派によって否認されてしまった³⁹⁾。

しかし、第2次大戦後には再びいくつかの新しい段階論が提唱されてきた。その代表例として、ロストウ (W. W. Rostow)⁴⁰⁾ の「経済成長の諸段階」(1960) であり、地理学畑においては、ボベク (H. Bobek, 1903-)⁴¹⁾ の論文「地理学からみた社会・経済の主要な発展段階」(1959) をあげることができる。このように発展段階論の再燃を促した契機としては次の諸点が指摘される。第1に、科学技術が高度に発達した反面、人類社会は未曾有の危機に直面している。その克服をめざす思想や方法が切実に求められていること。第2に、資本主義の没落よりも、その変質化がすすみ、一方では社会主義社会にも各種の形態が生れてきたので、現代世

界の状況を歴史類型的に概括する新しい視点が必要になったこと、第3に資本主義的イデオロギーと共産主義的イデオロギーとの対立が激化し、政治・経済・精神文化にわたる両陣営の抗争がつづき、人類の存否にもかかわるような破滅的世界戦争の脅威が感じられる状況下において、その対立を止揚すべき人類史的洞察、未来への希望を託せるような救済的思想が渴望されたこと。第4に、いわゆる発展途上国に対して経済ないし技術援助を行う場合に、先進資本主義社会において開発された純粋経済理論やエコノメトリーなどの適用が必ずしも被援助国に対しては有効ではないこと。とくに消費水準や技術段階の低い新興国において野心的な重工業化政策が採用されたとしても、経済発展や異質文化の受容を阻害する作用、すなわち住民の宗教観念や価値観、生産様式や社会制度などとの摩擦によって、その政策効果はむしろマイナスになりうること。要するに被援助国の文化的特質、社会経済の発展段階に即した方式が模索されていること。

3. 発展段階論とその指標

人類史における発展または進歩とは何を意味しているのか、また人類はいかなる目標に向かって進むべきか、という問いは人類の永遠の課題である。ここではその問題に立入ることはできないが、現在における人文現象の地域的差違を理解しやすくするのに役立つような文化の発展段階論とその立論の根拠や指標について簡単にふれておくことにする。

福沢諭吉(1834-1901)⁴²⁾は「文明論之概略」において、人類の経過すべき段階として、野蛮、半開、今の文明に至る段階を区別している。すなわち、今の文明とは「天地間の事物を規則の内に籠絡すれども、其内にありて自から活動を逞うし、人の気風快発にして旧慣に惑溺せず、身躬から其身を支配して他の恩威に依頼せず、躬から徳を脩め躬から智を研ぎ、古を慕わず今を足れりとせず、小安に安んぜずして未来の大成を謀り、進て退かず達して止まらず、学問の道は虚ならずして発明の基を開き、工商の業は日々盛にして幸福の源を深くし、人智は既に今日に用いて其幾分を余し、以て後日の謀を為すものの如し」というのである。

ここに言う文明とは、civilization のことである。これはラテン語の *civitas* (国家) に由来する言葉であって、「人間交際の次第に致りて良き方に赴く有様を形容したを語」と規定されている。そして、文明とは「衣食住の安楽のみならず、智を研ぎ徳を脩めて人間高尚の地位に昇るの意に解す可し」と規定し、要するに「文明は人の智徳の進歩」を意味し、「人間の目的は唯文明に達するの一事あるのみ」と結論している。

それでは一体、人の智徳の進歩はまずいかなるところに認められるのであろうか、その答えは「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」との名言に求められるであろう。カントの言葉を借りて換言すれば、「あなたの人格および、あらゆる他の者の人格における人間性を常に同時に目的として取り扱い、決して単に手段としてのみ用いないように行為せよ」という

ことになる。この格率はフランス革命の宣言に銘記された自由，平等，博愛の精神と相通ずるものである。こうした観点から歴史を通観すれば，ヘーゲル（1770-1831）⁴³⁾が述べたように「世界史は自由の意識における進歩」であり，「東洋人はただ一人の者が自由であることを知っていたにすぎず，ギリシア，ローマの世界は，奴隷をもっていたから，少数の者が自由であることを知っていたにすぎないが，われわれ（ゲルマン系の諸民族，キリスト教徒において）は，すべての人間，すなわち人間そのものは自由であることを知っている」という見解がえられる。ヘーゲルにあっては，この自由の理念が精神の本性として，かつ歴史の絶対的究極的目的となるのである。

しかし，自由の意識が現われても，それはただちに万人の自由が実現したことを意味するものではない。封建時代にはヨーロッパにおいても，農民の土地所有，移住，職業の選択，婚姻などに関しては領主によって各種の制限が課されていた。とくにエルベ川以東の諸地方においては，中世末から19世紀以降に一般化した農民解放に至るまで，世襲的な農奴制のグーツヘルシャフトが存続し，隷農の自由を著るしく制約していた。

封建的身分関係が廃棄された後でも，近代資本主義社会においては，生産手段の所有層とそれをもたない賃労働者，有産者と無産者との階級的対立が生じて，なお自由の普遍的实现が多かれ少なかれ阻げられている。このような欠陥を克服すべき社会主義国家においても，自由は強大な国家権力によってさまざまな程度に制限されているのが実情である。それはさておき，こうした階級的生産関係の視点に立って提立されたのが，原始共産制，奴隷制，資本主義，社会主義という五段階説である。もちろんこれが全人類史にどの程度まで妥当するものであるかは論議のあるところであり，とくに隷奴制に関して，あるいは画一的な発展図式をめぐって，なお今後とも史実に即した考察が必要であることは言うまでもない。

人文地理学においては，従来さまざまな観点から提唱されてきた諸種の発展段階論について，それぞれの思想的背景や論拠，妥当性などを歴史的に吟味するのがその任務ではない。むしろ，問題は段階論に用いられた指標と段階区分または歴史的類型が世界の地域区分にも参考になるか否かを検討することである。すなわち，複雑な要因によって生み出されている地域的差違を理解する一助として発展段階論が役に立つかどうかである。このような問題を考えるために，ここでは既出の主な段階論を，それぞれの指標⁴⁴⁾の特徴によって別表のように六つの類型に整理してみた。

4. ロストウの経済成長段階説

従来の諸段階と比べると，ロストウの観点は総合的であり，次に述べるように深い現代的意義をもっている。第1に，フリードリヒの第4段階以後の社会の発展に重点をおいて，それをさらに4段階に区分し，それぞれの特質と移行過程とを明確に説明している。第2に，発展段

文化（社会・経済）の発展段階比較表（西川 治：1974.6.18）

| 指 標 | 提 唱 者 | 段 階 | 階 層 |
|--------------------------------|------------------------------|--|-----|
| 理 性 の 向 上 | G. Vico (1668-1744) | 1. 神的・宗教的 2. 英雄的・神秘的 3. 市民的・科学的・論理的 | |
| | A. R. J. Turgo (1727-81) | 1. 神人同形的・神学的 2. 形而上学的 3. 機械論的・唯物論的 4. 数学的科学的説明 | |
| | M. de Condorcet (1743-94) | 「人間精神進歩の歴史概要」(1795) 1～10期 | |
| | A. Comte (1798-1857) | 1. 神学的段階 2. 形而上学的 3. 科学的・実証的（諸科学の階続（数学→天文学→物理学→化学→生物学→社会学＜実証哲学の全体系） | |
| | G. W. F. Hegel (1770-1831) | 世界史とは自由の意識の進歩。1. 一者の自由（東洋人） 2. 少数者（ギリシア・ローマ人） 3. 万人（ゲルマン系諸国民，キリスト教徒） | |
| 生 産 技 術 の 進 歩 | E. Friedrich (1903) | 1. 反射的動物的段階 2. 直覚的・順応的 3. 伝統的 4. 合理的・科学技術的段階 | |
| | K. Sapper (1935) | 農耕法：1. 植棒耕 2. 掘棒耕 3. 鋤耕 4. 犁耕 | |
| | G. D. H. Cole (1955) | 工業：1. 家内工業（民族的） 2. 工場制手工業（ギルド） 3. 工場制近代工業（株式会社） 4. オートメーション | |
| | | 産業命先の4段階：1. 製鉄業と石炭業 2. せんい産業，鉄道業，銀行業の発展 3. 大量生産普及 4. 合成化学とオートメーション | |
| 生 活 形 態 の 多 様 化 ・ 複 雑 化 | 古代から18世紀頃まで | 1. 狩猟 2. 遊牧（牧畜） 3. 農耕 | |
| | F. List (1789-1846) (1841) | 1. 野蛮状態（狩猟・漁撈） 2. 牧畜 3. 農耕 4. 農工 5. 農工商 | |
| | C. G. Clark (1905～) (1951) | 第1次産業 第2次 第3次 | |
| 社 会 的 協 同 単 位 の 増 大 | K. Bücher (1847-1930) (1893) | 1. 封鎖的家内経済 2. 都市経済 3. 国民経済 | |
| | G. Schmoller (1838-1917) | 1. 村落経済 2. 都市経済 3. 国民経済 | |
| | 水津一朗 (1958) ⁴⁷⁾ | 1. G-M 2. G-M-L 3. G-M-L-S 4. (G)-(M)-L-S-E 5. (L)-(S)-E-C | |
| 所 得 の 増 大 と 社 会 の 平 等 化 (生産関係) | K. Marx (1818-1883) | 1. 原始共産制 2. 奴隷制 3. 封建制 4. 資本主義 5. 社会主義 | |
| | W. W. Rostow (1960) | 1. 伝統的社会 2. 離陸準備期 3. 離陸期 4. 成熟期 5. 高度大衆消費時代 | |
| | H. Bobek (1959) | 1. 食料採集 2. 特殊化した採集，狩猟，漁撈者 3. 氏族の農民社会 4. 支配者によって組織された農業社会 5. 古い都市社会と利子資本主義 6. 生産資本主義，工業社会，新都市社会 | |

階のメルクマールとしては、各時代の指導的な考え方、価値観をはじめとして、政治権力の所在と政策、社会構造、投資率と産出高の増大、生産技術、人口、消費生活などを採用している。それに社会全体の動きの中において経済的諸力と社会的政治的な諸力とを関連づけること、すなわち総合的考察に努力を払っている。第3に、離陸の最も早かったイギリスをはじめ、それに後れて続く13カ国を選び、それらの各段階への突入年代と特殊性を示している。第4に、ロストウの著書の副題に銘記されているように、これは“一つの非共産主義宣言”であり、その成長段階分析がマルクス主義と共産主義と比べてどのような点で異なるかを究明し、マルクス主義からレーニン主義への変化、現代共産主義の特質、および非マルクスの資本主義社会の変貌なども簡潔に論述している。

そして、この成長段階分析は、「豊かな時代をもって終るのでもなく、……世俗的精神の沈滞の問題をもって終るのでもなく、またアメリカ合衆国とその莫大な数の赤ん坊とをもって終るのですらない。この分析は、ジャカルタ・ラングーン・ニューデリー・カラチの人々や、テヘラン・バグダッド・カイロの人口や砂漠の南のアクラ・ラゴス・ソールズベリーの人々のもつジレンマと悩みとをもって終るのである。何となれば、われわれ高度大衆消費段階に現在住んでいるものの運命は、遠い国々の先行条件期の過程のもつ性質や離陸の性質によって実質的に決定されようとしているからである」と結んでいる。このような見解から視えるように、その主旨は、単に世界史を回顧するのが目的ではなくして、いろいろな発展段階に対応する多くの国々からなるこの複雑多様な現代世界を正しく認識して、世界を破壊せず文明を保持していく道を探索する責任が民主主義的北の世界に住む人々にあることを悟らせる点にある。

5. 人文地理学的发展段階論

社会学者の富永健一⁴⁵⁾は、諸発展段階説を三つのグループ、すなわち、(1) 経済発展段階説、(2) マルクス主義の史的唯物論、(3) 社会学的发展段階論（スペンサー：軍事型社会から産業型社会へ。テンニース：ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ。デュルケーム：機械的連帯から有機的連帯へ）に分けてそれぞれの特徴を比較検討している。われわれはこれらに対して人文地理学的发展段階論の立場を表明せねばならない。すでに述べたように人文地理学者が发展段階論に対して関心をもつ理由の一つは、それが現在あるいは過去の主要な時代における地理的断面に現われた人文生態系の地域的差異を説明するさいに有力な手がかりとなりうると思われるからである。しかし人文地理学者は他学科のこのような成果をただ借用するだけではすまされない。逆に人文地理学は従来の发展段階論に地域分化的観点あるいは人文生態学的視角を加えることによって歴史的考察に新しい地平を開く必要がある。果して今までにその要請に対してどれほど答えることができたかどうか、地理学の側からは判断を差し控えるとして、以下2、3の事例を紹介することにしたい。

(1) **G. テイラー⁴⁶⁾の7段階説** テイラーはその晩年の著書(1947)において、文明の進歩史を七つの時代に分けて簡単にまとめている。その第1はホモ・サピエンスに先立つ人類の時代で、100万年ぐらいつづいた。第2の時代は気候変化、人類の大移動、人種の分化によって代表される。過去10万年以前からだいたい紀元前1万年前まで。第3は、紀元前1万年から紀元後400年ごろにわたる時代で、アルプス人種の拡大、農牧業の発明による生活様式の多様化、都市と国家の発生、哲学の時代。第4はナショナリズムの時代でヨーロッパでは400年ごろに始まり約1,200年間つづいた。その間に森林の大規模な開拓が進み、各地方にさまざまな文化集団が成立した。第5は海外征服の時代で、1,600年ごろに始まり、約250年間つづいた。人種あるいは文化の混合が進み、前コロンブス時代との対照がきわ立つ。第6は産業革命の時代である。石炭、鉄、鉄道、都市、貿易等がその特徴となる。第7は現代であり、不幸にもその大部分は世界戦争とその影響下にあった。しかし1947年の時点に立ってみる時、今後は電力や石油、さらにエレクトロニクスや原子力、航空の時代となるであろうし、生活内容が格段に向上し、社会的不公平の解決、インタナショナリズムの時代に発展することが期待されるのである。

以上略述したテイラーの7段階説は、かれの提唱する *geopacifism* の課題、平和な世界の建設に文明史的展望を与えるために素描されたのであって、発展段階論自体としてはそれほど組織立ったものではない。しかし、それは地理学者テイラーのヒューマニズムに培われたユニークな思想として評価されねばならないであろう。

(2) **人文生態系の発達段階** 人間は社会、経済、文化の発展につれて、自然を改変し、文化環境を拡充し、しだいに高度に組織された複雑な人文生態系を形成し、地球上に多様な文化景観を展開させてきた。この過程を地理学者ボベク(H. Bobek, 1903-) ⁴⁷⁾ は次に示すような社会・経済の主要な発展段階として捉えている。そのために用いられた指標は、生活形態、人口、文化景観である。これらによって次の6段階が区別された。すなわち、① 食料採集段階、② 特殊化した採集者、狩猟者、漁撈者の段階、③ 氏族農民社会の段階、遊牧社会の分岐を伴う。④ 支配者によって組織された農耕社会、⑤ 古い型の都市社会と利子資本主義、⑥ 生産資本主義、工業社会、新しい型の都市社会の段階。

以上のうちで最も独創的であるのは利子資本主義段階論である。ボベクは、イランをはじめとして中近東諸国における長年の実地研究の成果に基づいて、この考え方に到達した。そしてその世界史的意義と、その伝統が長く保持された地方における近代化の遅れた理由などについても説明している。そののみならず、注目すべきは前コロンブス時代(15世紀末ごろ)の断面において、上記の各段階類型に該当する諸地域を示した世界地図である。このような段階区分図が世界史の重要なエポックごとに作成されたならば、それは一つの地理学的世界史像として高

く評価されるであろう。

(3) **地域進化の段階論** 水津一朗⁴⁷⁾は「地域」の機能進化について、既住の実証研究の諸成果を一応整理して、五つの段階を図示した。その第1段階は、G（原初的ムラ，基礎地域）とM（G群をむすびつける生活二次圏）とからなる。第2段階は、G（・Gは共通性をまし，外来要素をうけ入れる）とM（郷，郡，ハンドレッド等，100—300km²）とL（クニ，カウンティ，キウィターテス等，2000—3000km²）とからなる。第3段階は、G（地域相互の連結化）とM（局地的再生産圏，在郷町）とLおよびS（近代国家領域の祖型，藩領の形，10,000—25,000km²）とからなる。第4段階は、G，M，L（地域的拘束力弱まる），S（近代国家の領域，生活を規制する第1級の地域），E（国際貿易政治の場）とからなる。第5段階は、S以下の地域単位は稀薄化し，Eが強力になり，C（宇宙）に開かれたスプートニック時代の地域組織が予想される。このような生活空間の発展図式は，地理学的な歴史像の基礎としてまことに有意義なものである。そして，クリスターラーが演繹した中心地理論とその静的空間モデルをいわば動態化し，歴史的に一般化した変動モデルの構築をめざす試みとして特記されねばならない。

(4) **大都市の発展段階** 筆者⁴⁸⁾はかつて，都市の発達に伴って進行する都市地域の分化を考慮しながら次のように大都市の発展段階を区別した。すなわち

第1，大都市の成立段階 第2，巨大都市化，メトロポリタニゼーションの段階 第3，巨帯都市化，メガロポリタニゼーションの段階 第4，国際的巨帯都市化，エキュメノポリタニゼーションの段階

以下それぞれの段階について簡単に説明しておく。

大都市の成立段階，これはW・W・ロストウの離陸期に対応し，特定の有利な地点に，主として工業的企業が先行的に集積して大都市化を主導する段階である。都市には求心力の方が遠心力よりも強く作用し，都市は凝集的に成長するが，都心部の発達，あるいは，中央業務街（C・B・D）の範囲は限られていて，都市地域の分化はまだ不十分であり，工場と住居の混在，公共施設の不足などによる環境の悪化がひどくなり，スラム街も出現する。

巨大都市化の段階 高度資本主義，独占的企業の増大する段階で，ロストウの成熟への前進期に対応する。技術革新，資本の大規模化，高速大量輸送手段・通信手段の発達，国際貿易の拡大等に関連して重化学工業化が進展する。都心部には各企業の管理中枢機能，各種の政府機関，多種多様の卸・小売業・サービス業等が集中して中央業務街を高層化し，その範囲を拡大させ，主要な交通ターミナルには副都心も形成される。他方では，都心部や旧市街における地価の高騰，土地利用の混在，公害，交通渋滞などに起因する工業立地条件および生活環境の悪化を忌避する工場や住宅，学校や病院等の郊外移転が盛んになる。同時に，巨大都市環境から

得られる外部経済都市経済に誘引されて、多くの工業その他の事業所が郊外に新增設され、市街地の拡大、近郊の都市化、および独立都市間の市街地接続(コナーベーション)を促進する。こうして、通勤圏は拡大し、中心都市の勢力圏は固有の行政区域を越えてひろがり、巨大都市地域の分化が進むとともに、そこに包含される多数の独立した地方自治体間の利害対立、行財政上の矛盾、社会問題が大きくなる。このようなメトロポリタニゼーションにおける遠心運動は、自動車・トラック・高速道路・電信電話・電力供給力の発達普及に負っている。

巨帯都市化の段階 これは所得の増大、生活水準の向上による大衆消費時代(ロストウ)に対応する。自動制御・原子力・組織工学等を中心に技術革新が一段と進み、国際資本・企業の活動も及んでくる。各種の耐久消費財の生産のみならず、知識・情報産業、レジャー産業、社会福祉・厚生事業が盛んになる。社会のモビリティがいっそう高まり、いくつかのメトロポールとその間の大小の都市群がコナーベーションによって、しだいに連続し、鎖でつながった形状を呈し、航空路・高速道路・鉄道・直通電話網、テレックス・テレタイプ、コンピュータシステム等によって巨帯都市地域内の交流が活発に行われる。こと段階には都市人口率は80%ぐらいに達するであろう。

国際的巨帯都市 宇宙開発・海洋開発、熱帯雨林地帯や乾燥地帯の開発も進み、人口は100億台に増加し、世界的な超高速・大量輸送および通信手段の発達にともなって進展するであろう世界的都市化の段階。メガロポリタニゼーションがさらに拡大して、国土は都市帯網を骨格として組織され、しばしば隣接国家間における巨帯都市の連合にまで発展するであろう。そしてついには地球全体を連結する巨帯都市網、国際的な定住社会が形成されるであろう。これがドクシフディス⁴⁹⁾の名付けたエキュメノポリスの段階である。

あ と が き

現代世界の特徴を示すものは、国際主義と国家主義、資本主義と社会主義、先進国と途上国、資源食糧の供給国と需要国、人口過密国と稀薄国、というように対極的な二つの思想・主義、あるいは二つの国家群間のきびしい緊張関係である。それは激増する人口、資源や食糧の供給に対する不安の増大とともに、人類の未来社会への展望を暗くする要素となっている。産業組織の巨大化、情報通信技術の発達、大都市への人口集中が激化するなかで、国家の管理機能、公共投資活動もますます活発化してきた。こうした社会の激動期に直面して、専門分化した基礎科学も技術学も再編成をせまられ、各種の総観学、システム学、プロジェクト研究組織が創出されつつある。その動きの中で、地理学も前望的科学として、予測への参加が強く期待されている。しかし来年の計を立てるには10年一昔をかえりみ、10年先の予測をより確実なものとするためには、過去100年間の社会経済史を、100年先きを想像するには過去1000年

の文明史を省察する必要があるのではなかろうか。経済学者のマーシャル⁵⁰⁾が適切に指摘したように、「説明と予測は方向は逆であるが、操作としては同一である。ただ徹底的な分析の上に立った過去の事実の解釈だけが将来に対する良い指針となりうる」のである。本稿において歴史と地理との関係について、いささか常識的ではあるが、なるべく広く見直すことにしたのは、どうすれば、いわゆる伝統的・古典的地理学と計量的、地域動態論的地理学とを結びつけ、両者を高い次元で融合させることができるか、そして地理学の諸力を結集してその確かな地平線上のスクリーンに明るい未来社会の姿を投影するにはどうしたらよいのか、そうした難問を同学の士とともに模索していきたいからである。

参 考 文 献

- 1) Finberg, H. P. R. (ed.) (1962) : Approaches to History. A Symposium. Routledge & Kegan Paul. 歴史へのアプローチ, 創文社, このなかの H. C. ダービー : 「歴史地理学」参照。石川栄吉訳による。
- 2) 小牧實繁 (1933) : 歴史地理学, 岩波講座 (総論)。
飯塚浩二 (1966) : 地理学と歴史, 古今書院。
- 3) 朝倉書店刊 (1975) : 歴史地理学講座 3 巻。
- 4) Kant, I. (1802) : Physische Geographie. 三枝充憲訳 (1966) : 自然地理学 (理想社版, カント全集第15巻) pp. 43-46.
- 5) Voltaire (1756) : Philosophie de l'histoire.
- 6) Voltaire (1753~69) : Essai sur les moeurs et l'esprit des nations.
- 7) Meinecke, F. (1936) : Die Entstehung des Historismus.
I. Bd. Vorstufen und Aufklärungshistorie.
II. Bd. Die deutsche Bewegung.
- 8) Weinert, H. K. (1949) : Voltaire und die Geographie im Zeitalter der Aufklärung. Festschr. z. 70. Geburtstag L. Mecking. S. 239-249.
- 9) Herder, J. G. von (1784-1791) : Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschen.
- 10) Ritter, C. (1822-1859) : Die Erdkunde im Verhältnis zur Natur und zur Geschichte des Menschen.
- 11) Corral, L. D. del (1954) : El Rapto de Europa. Madrid. 小島威彦訳 : ヨーロッパの略奪 (未来社)。
- 12) コラール (1962), 小島威彦・鈴木成高訳 : 「歴史の運命と進歩」未来社。
- 13) Meitzen, A. (1895) : Siedlung und Agrarwesen der West-und Ostgermanen, Kelten, Römer, Finnen und Slaven.
- 14) Bradford, J. (1957) : Ancient Landscapes. Studies in Field Archaeology, London.
- 15) Beresford, M. (1954) : The Lost Villages of England, Lutterworth Pr., London.
- 16) Bloch, M. (1931) : Les caracteres originaux de l'histoire rural française, Oslo : H. Aschehoug & Co.

- 河野健二・飯沼二郎訳(創文社): フランス農村史の基本性格, 序参照。
- 17) 木村尚三郎 (1968): 歴史の発見 (中公新書168), pp. 18-21.
 - 18) 木村尚三郎 (1975): 近代の神話 (中公新書413), p. 51.
 - 19) Ratzel, F. (1882): *Anthropogeographie, Erster Teil: Grundzüge der Anwendung der Erdkunde auf die Geschichte*, Stuttgart, § 94~98.
 - 20) Taylor, G. (1919): *Climatic Cycles and Evolution*. *Geog. Rev.* 8, 285-328.
 - 21) 大林太良 (1967): ヴィルヘルム・シュミットとその文化圏体系の成立過程, 一橋論叢57, 437-457.
 - 22) 柳田国男 (1943): 蝸牛考 (創元社), pp. 171.
 - 23) 柴田 武 (1963): 言語の全国分布, 人類科学15, 149-164.
 - 24) 金田一春彦 (1963): 音韻・アクセントによる日本語の方言区画, 人類科学15, 137-149.
 - 25) Baker, A. R. H., Hamshere, J. D., Langton, J. (1970): *Geographical Interpretations of Historical Sources. Readings in Historical Geography*, David & Charles, Newton Abbot, Introduction.
 - 26) 辻村太郎 (1937): 景観の研究, 岩波書店。
 - 27) 辻村太郎 (1942): 景観地理学講話, 地人書館。
 - 28) Dobrowolska, M. (1948): *Dynamika Krajobrazu Kulturalnego*, *Przegląd Geograficzny*. 21.
 - 29) Troll, C. (1950): *Die geographische Landschaft und ihre Erforschung*, *Studium Generale*. 3, S. 163-181.
 - 30) Clements, F. E. (1916): *Plant Succession; an Analysis of the Development of Vegetation*, Washington, D. C.
 - 31) Whittlesey, D. (1929): *Sequent Occupance* A. A. A. G. 14.
Whittlesey, D. (1945): *The Horizon of Geography*, A. A. A. G. 35.
 - 32) Ackerman, E. A. (1941): *Sequent Occupance of a Boston Suburban Community*, *Econ. Geog.* 17.
 - 33) Dodge, S. D. (1931): *The Interpretation of Sequent Occupance*, A. A. A. G. 28.
 - 34) Durand, L. J. R. (1945): *The West Shawno Upland of Wisconsin. A Study of Regional Development Basic to the Great Lakes Cut-Over Regions*, A. A. A. G. 35.
 - 35) Sapper, K. (1930): *Allgemeine Wirtschafts-und Verkehrsgeographie*. Leipzig.
 - 36) Jaeger, F. (1934): *Versuch einer anthropogeographischen Gliederung der Erdoberfläche*, *Pet. Mitt.* 80.
 - 37) Jaeger, F. (1943): *Neuer Versuch einer anthropogeographischen Gliederung der Erdoberfläche*, *Pet. Mitt.* 32.
 - 38) Febvre, L. (1922): *La terre et l'évolution humaine*, 田辺裕訳: 大地と人類の進化(下) (岩波文庫), pp. 107-109.
 - 39) 石田英一郎 (1959): 文化人類学序説 (時潮社), pp. 193-194.
 - 40) Rostow, W. W. (1960): *The Stages of Economic Growth. A Non-Communist Manifesto*, London. (木村健康・久保まち子・村上泰亮共訳; 経済成長の諸段階, ダイヤモンド社, 1961)。
 - 41) Bobek, H. (1959): *Die Hauptstufen der Gesellschafts-und wirtschaftsentfaltung in geographischer Sicht*, *Erde*, 90, 259-298.
 - 42) 福沢諭吉 (1875): 文明論之概略 (岩波文庫), p. 25, pp. 51-64.

- 43) Hegel, G. W. F. (1830-31) : Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte. (武市健人訳 : 歴史哲学, 岩波文庫, 上, pp. 76-79)。
- 44) 村松繁樹・川喜田二郎 (1955) : 人文地理学入門 (ミネルヴァ書房), pp. 48-58.
- 45) 富永健一 (1965) : 社会変動の理論 (岩波書店) pp. 7-17.
- 46) Taylor, G. (1947) : Our Evolving Civilization. An Introduction to Geopacifics, § The Seven Ages of Man, pp. 358-362.
- 47) 水津一郎 (1958) : 「地域論」の機能主義的展開, 地理評31, pp. 577-590, とくに p. 581.
- 48) 西川 治 (1970) : 大都市の成立と巨大化の要因, ジュリスト445号, pp. 49-54. とくに p. 50-51.
- 49) Doxiadis, C. A. (1968) : Ekistics. An Introduction to the Science of Human Settlements.
- 50) Marshall, Alfred (1890) : Principles of Economics. 馬場啓之助訳 : 「経済学の原理」, I-付録 C-3. (東洋経済新報社)。

(本研究には昭和47, 48年度, 文部省科学研究費の一部を使用した。記して謝意を表する。)

On the Relationship between Geography and History

by Osamu NISHIKAWA

Contents:

- I. Geographical Viewpoint of History
 1. Geographical Foundation of History
 2. Reverse Method in History
 3. The Zones and Strata Theory
- II. Historical Interpretation of Geographical Phenomena
 1. Historical Geography
 2. Study on Landscape Change
 3. Study on Sequent Occupance
- III. Theories on the Stages of Cultural or Socio-economic Development
 1. Their Application to Geographical Research
 2. Theories of the Development Stages and Their Criteria
 3. The Rostow's Stages of Economic Growth
- IV. Theories of the Development Stages in Human Geography
 1. G. Taylor's "The Seven Ages of Man"
 2. H. Bobek's "The Main Stages of Socio-economic Development"
 3. I. Suizu's "Scheme of the Development of the Functional Regions"
 4. Development Stages of Large Urban Area
- V. Conclusion

Many authors have argued on logical differences as well as on mutually complementary relationship between geography and history.

It is yet doubtful whether historians have so much interested in geographical point of views as geographers have attached importance to the historical interpretation of areal differentiation in cultural and socio-economic features. A history ignoring the areal differentiation is far from reality and universality.

In this meaning many of the theories on the stages of cultural or socio-economic development must be criticized from geographical angle. It is however assumable

that some criteria and indices used in the growth theories may be helpful for regionalizing the world or its large parts.

For this reason the author has tried to arrange the various theories as shown in a table using following criteria: upswing of reason, development in industrial technology and labor productivity, expansion of social cooperative unit, increase of income and social equalization, and compound criteria. On the other hand, it is indispensable to devise more suitable growth models for our own purpose. In 1959 H. Bobek furnished an excellent article on the main stages of socio-economic development. This may be regarded as a good example of a geographical view of the world history, which explains the evolution of human ecosystems. The year before I. Suizu presented a nice model for illustrating the development of functional regions. These works must contribute to historical consideration. In 1970 the author attempted to distinguish the development of large urban area into four stages referring the Rostow's theory: the formative stages of a large city, and the successive stages of metropolitanization, megalopolitanization, and of ecumenopolitanization. It is further necessary to elaborate more useful dynamic models for a better understanding the development of areal functional organization.